

アリストテレスの意味論 - 既知及び未知なものを包括する -

著者	千葉 恵
雑誌名	モラリア
巻	28
ページ	3-27
発行年	2021-11-30
URL	http://hdl.handle.net/10097/00133357

【特集】

アリストテレスの意味論

—— 既知及び未知なものを包括する^① ——

千葉 恵

一 はじめに——探求のアポリア克服の意味論——

アリストテレスは固有の領域をもたずあらゆる個別科学や形而上学に適用される言語哲学、弁証術、論理学、論証理論の研究である『命題論』、『トピカ』そして『分析論』のそれぞれの文脈に応じて、言語と心とものごと（実在）の関わり の 解明に従事している。『トピカ』においては問答の吟味の技術としての弁証術の理論が構築されるが、その理論のもとにあらゆる主張文を吟味すべくプロとコントラの蓋然的な議論を弁証術の実践として提供する。その理論は「いかに語るべきか（*pōs dei legein*）」（1030a27, 16a31）¹「いかに問うべきか（*pōs dei erōtan*）」（155b3, 175a1）の規範性のもとに、文とその下位構成要素の分析を矛盾律に即して厳密に「ロギコース（*logikos* 形式言論構築術的に）」（1041a28, 105b11）為すことにより展開される。例えば、「これ」という指示は実体にのみ適用され、性質語である「白」の一つの色見本については「このようなもの」と語られねばならない（1039a1-16, 1033b23, 434a18）。

アリストテレスは「何であるか」へのソクラテス的探求がいつもアポリアに陥ることから、「何であるか」

「を問うこと」なしに (*choris ti ti estin*) 即ち「何であるか?」の問いを禁止、封印し、「然り」または「否」の応答のみにて対応するシステムを構築した (*Met.1078b17-30, Top.158a14-17*)。そこで彼はアカデメイアの伝統的なこの問に対し予め可能な応答として主語に述べ立てられる述語、所謂「述語づけ可能なもの (*predicabilia*)」を四種類挙げている (*Top.18*)。この述語の種類に基づき「述定 (*katēgoria*)」即ち主語について述語を述べ立てるその述べ立ての種類が十種類挙げられる (所謂「範疇」) (*Top.19*)。この『トピカ』における言語分析の道具は論理学や探求論のまた形而上学に至る諸科学の基礎作業となっている。

「語る」ということは言語とそれを用いる魂とそれにより指示され、その解明に向かう實在、つまり言語、魂 (心魂)、ものと (世界・實在) という三つの項目の関連性のなかで遂行される。これら三つの項目に関わる言語の振る舞いの理論を「意味論」と呼ぶ。

そこで鍵になるのが「意味表示する (*semainein*)」の分析である。『トピカ』においては「眼前に置かれてあるもの (*ekkeimenon*)」(以下「眼前者」) 即ち存在することが明白でありその非存在が考慮の外にある既知なものについて語句の意味表示の分析が遂行される。他方、『分析論後書』における探求論の文脈においては未知者を表現する語句の意味理解も問題となる。未知者 (例「山羊鹿」(*92b7*)) の意味は既知者 (「山羊」と「鹿」) の複合により把握される。弁証術と探求論双方に共通するものは「何であるか」とその言表としての「定義」の形成というソクラテスの問答法の課題である。本稿において、「名前「F」が何を意味表示するか」の言表と「Fは何であるか」の言表である定義の関係を考察する。アリストテレスの既知なものとの未知なものごと双方についても包括する意味論がいかなるものであるかを、この関係をめぐる心魂の認知的働きの分析を介して明らかにする。

二 探求論に組み込まれる意味表示の理論

「何を意味表示するかのロゴス（言表）」はそれ自身定義ではないが、「何であるかのロゴス（言表）」（*logos ti n est*）」である定義との関係において秩序づけられる。彼は『分析論後書』II10で名前が何を意味表示するかの或る言表と定義の関係は「明白」であると主張する。「定義は「何であるか」の言表であると語られるので、「名前や名前のような他の言表が何を意味表示するか」の或る言表（*ris logos*）が定義となるであろう」（*estai*「未来形は発見的探求の成功した時点を示す」）こと明らかである」（93b29）。この明白性は両者の四つの形式的組み合わせを念頭において基礎づけられている。記号化すれば（1） S^+E^- （2） S^+E^- （ ∞ ） S^+E^+ （4） S^+E^- となる、ただし S^+ は名前が何を意味表示するかの成功した言表を、 E^+ は何であるかの成功した言表を表現している。

II7において（2）は不条理であるとして排除されている、「定義する者は何であるか或いは名前が何を意味表示するかを明らかにするなら、もしそれが何であるかについてはないとするなら」（2） S^+E^- 、定義は名前と同じものを意味表示する言表となるであろう。しかし、それは不条理である」（92b26-28）。定義が意味表示の言表に吸収同化された場合の不条理さの理由が三つ挙げられる。この前提のもとでは定義者はただ名前が意味表示するものは何かを明らかにする言語次元に留まることになり、意味表示の言表は探求論に正しく組み込まれることがない。そこでは非—実体についてだけでなく、非存在についても定義が存在することになる、非存在も対話ができるという仕方で有意義な名前を持ちうるからである。第二は、ひととどんな言表にも名前を付すことができるので、あらゆる言表が定義になるでもあらうからである。「それ故に、われらはすべての会話において定義形成句を語りそして「イリアス」も定義となるであらう」（92b30f）。

「イリアス」のたとえ最初の文章だけを吟唱するにしても、それに名前を付けることができるので、定義形成句を吟唱していることになる。第三に、「いかなる字もこの名前がこれを明らかにすることとを論証しないであろうし、そのとき定義もこれを加えて明らかにすることはないのである」(9232-34)。この仮定のもとでは、いかなる字間も名前が何を意味表示するかがものごとによって「これ」という指示が届くことを保証できず、名前の意味表示の言表と在ることの論証の対象のあいだの同一性を確立しえないということ、さらに論証に基づく定義も加えて同一性を確立しえないことになる。それ故に、新しい定義論は(2) S^+E^- を排除することにより定義が意味表示の言表に吸収されずにむしろ秩序づけるそのような本質を開示する定義((1) S^+E^+)の理論が求められる。

三 ロゴスの実在論のもとの探求と学習

ソクラテスは学習と探求が不可能であるというメノンの逆説を提示するが、アリストテレスは先行知識の不可欠性の確認によりそれを乗り越える(71a29, Plato, *Meno*, 80d5-8)。ひとは誰であれ学習や探求において適切な過程を踏むことが求められる。そのさいものごとは認識主体とは独立にそれ自身の本質や本性を備えているという実在論のもとに探求が進められる。何であれ最善の理論(ロゴス)はものごとの理(ロゴス)を開示することができるという立場である。知者は親であれ教師であれ、語句の意味を約定的に次世代に伝える。例えば、「エントロピー」という語句の意味は熱力学の第二法則について熟知している物理学者こそ正しく理解し、教えうる(酒井 127, 173)。この立場がいかなる言論をめぐる議論をも常に成功した視点からの分析を要求することになる。

確かに、探求は未知なものととの存在と本質を知ることに向けられる。しかし、既知なものを学ぶ学習と未知の探求双方において、実在論は学習と探求の目標が同一の本質のロゴス、言表であることを基礎に据えている。非存在者についてはそれについて語り合える限り意味の理解は成立しているが、学的知識には至らない。そして、最善の説明とものごとの理の合致はいたずらな懷疑論者、観念論者を除けば道理あるものとして承認されることがらであろう。というのも、実際、われらは誰であれ「学習」や「探求」をそれ自身においてある何かソリッドなものに向けられているという前提のもとに遂行するからである。

『分析論後書』二冒頭の教授と学習の文脈において、アリストテレスは「すべての教授とすべての認知的学習は先行する知識に基づき生じる」(71a1)と述べ、二種類の先行知識の必然性を提示する。「或るものどもに關しては、在ることを前もって把握していること必然である、他のものどもに關しては、語られているものが何であるか (*ti to legomenon esti*) を理解していなければならぬ」(71a12-13、酒井117)。ここで「在ること」の把握とはものごとFの属性を伴った存在 (Fがあること) の発見的認識のことである (71a14, 19, cf. 93a21-2)。存在把握と対比される「語られているものが何であるか?」は世界への指示は括弧にいれられ言語表現そのものの意味理解が問題とされている。「一」のような算術の類の原理については「それが何を意味表示するかそしてそれが在ること双方」の先行知識が求められる。この対比から明らかなこととして、「語られているもの (*to legomenon*)」は言語的次元に留まり、これが何を意味表示するかの理解において、その指示対象が存在することの把握は要請されていない。非存在者もその意味は理解できると想定されている。

彼は語句の意味理解は約定により得られ、実在との関わりを括弧にいれることができるとして『命題論』

で言う。「名前は時間なしの約定に即した有意味な音声 (*phonē semanticē*) である。・・・「約定 (*to kata sunthēken*)」とはいかなる名前も自然によってあるのではないが、「何かの」シンボル (代理) となる時、名前となるということである・・・動詞は時間を加えて意味表示し、例えば「健康」は名前であるが「健康である」は動詞である、というのも今内属していることを意味表示しているからである。・・・動詞はそれ自身で発話されるときひとつの名前でありそして何かを意味表示する (なぜなら話者はひとつの思考を提示し、聴者はそれを保持するから)、しかし、それはまだ在るか在らぬかを意味表示していない。というのも、「在る」、「在らぬ」双方ともものごとの記号ではないからであり「約定ではなく、発見のことがらである」、たとえ「在る」それ自身を自らに即して裸で語っても、そうではないからである。というのも、かたやそれ自身何ものでもなく、他方共に置かれるものどもなしにその知を得ることがないところの或る結合を加えて意味表示するからである」(16a19-623、酒井162)。語句の意味や存在の容認に基づく約定と探求の終わりに発見的知識に基づき得られる定義の關係こそ解明されねばならない、そのさい定義はこの實在するものごとについての主語と動詞からなる或る言表である (酒井165)。

探求により語彙の意味理解にはじまりものごとの存在と本質を把握したひとは教授者となり、世界の在り様、實在を括弧に入れて学習者にまず言語的存在者の意味の理解を教えその上で対象の存在を論証してみせる (cf. *Met. IV 8, 1012b6-8*)。他方、弁証術の実践はドクサ (通念) の次元でプロとコントラの議論を展開する限り、知者は「状況が要求する場合」(42a13.a33) 対人論法により自らの實在の知識を括弧にいれて、問答者や学習者と同じ次元で語る場合がある。

究極的探求対象「神」(89b34, 1177b31) については、一方、知者たちは名前「神」の意味理解から教える

遂行するが、他方学習者は探求者となる場合には知識主張する者たち同様に、先人たちの意味理解を手掛かりに魂の認知的エルゴン（働き）上今・ここの発見を目指す。パスカルが見出したのは単なる神の存在ではなく、「アブラハム、イサク、ヤコブの神」である。これは聖書の記述の一般的な理解から探求の方向が定められたケースである。神は発見的探求の対象である。実際探求は失敗することもあるが、語句の意味理解から存在と本質の発見に向かうさいに、本質の把握は定義として提示されその成功した視点から意味表示の成功も理解される $((1) S^+ E^+)$ 。 $((3) S E^+)$ は探求過程上実際にはありえない。 $((2)$ 非存在については約定的な意味理解に留まる。

論証科学の文脈においては知識を持つ権威者は当該語句の意味や第一原理の存在の先行認識のもと「帰納」や「推論」により知識を正しく学習者に教える。もちろんアリストテレスの論証科学の理論的構想はいかに厳密な科学的知識を獲得しうるかその構造を説明することであるが、論証理論の実用的な局面においてはいかに知識を伝達しうるかが問題となる（71.25-9）。

四 「何を意味表示するかの或る言表」

『分析論後書』二巻探求論において論証理論は「中項」が「根拠」の代替をなすように探求を学的なものとする規準として用いられる。IIIOにおいて学的知識をもたらず論証理論との関連において三種類の定義が提示されている。この探求の過程もロゴスの实在論により秩序づけられており、定義論から意味論も秩序づけられている。

探求論の構築を介してIIIOにおいて論証と関わる三種類の定義が提示されるが、その冒頭において意味

表示の理解と何であるかの把握の關係が論じられる。ここでも様々な言表のうち「或る」言表は定義となるような成功した場合を規準に包括的視点から展開される。

定義は「何であるか」の言表であると語られるので、「名前や名前のような他の言表は何を意味表示するか」の**或る**言表 (*his logos*) が定義となるであろう (*est*) こと明らかである。例えば、「三角形」が「何を意味表示するか」は、それが三角形である限りにおいて、「何であるか」である。まさにそのもの「三角形」により意味表示されるもの」が存在することを把握することによって、われらはそれが何故にそれであるかを探求する。その存在をわれらが知らないものごとに関して、それ「当該の名前が意味表示するもの」をこの仕方で「何であるか」の言表として」容認すること (*labein*) は困難である。困難さの理由は既に「92b19-25」語られたが、われらは在るか不在か付帶的という仕方においてしか知らないからである」(93b29-35) (93b31: *to ti sēmainei, ti esti hē trigōnō* (Bekker))。容認すること (*labein*) (b32) については「幾何学者は「三角形」が何を意味表示するかを容認した (*elaben*) が、彼はそれが存在することを証明する」参照 (92b15-17: cf. 76a33, 76b7, 71a12) *pace* 酒井¹⁰⁰⁾。

アリストテレスはこのように探求の過程を三段階に分節しており、ここでは名前「F」が「何を意味表示するか」の理解からその当該のものとFの「存在」さらには因果論的展開により「何故にFか」の論証に基づきその定義「Fは何であるか」の理解に至る。ものごとFの存在の発見には程度があり、(Fがある)存在だけが発見されることはなく、その「付帶的属性」或いは「自体的属性」と共に発見され、それを通じて、第三段階において、Fを一なるものたらしめている根拠としての「本質」即ち「何であるか」の一つで

あり最も厳しい条件を満たす「何であったか」のロゴスが発見され、学的知識が得られる (93a24-28' pace 酒井¹²²)。

彼は名前が何を意味表示するかの或る言表と定義の一種類のあいだの関係をめぐる「明白性」主張をなすとき、彼はそれらのあいだの先述の四つの形式的組み合わせを念頭においている：(1) S^+E^+ 、(2) S^+E^- 、(3) S^-E^+ 、(4) S^-E^- 。(2)は「不条理」の故に否定されており、(3)と(4)は語句の意味理解なしに定義が成り立つことはない故に、探求論の過程から排除されている。かくして意味表示する言表(1)と(2)のなかで(1)だけが明らかに定義を構成するであろう。

この三角形の事例は一つの名前が何を意味表示するかの言表がそこにおいて何であるかの言表である事例として挙げられる。言語的存在者「三角形」について何であるかを語り、それにより指示されるものが「三角形である限り」、ものごと三角形の「何であるか」の言表となる、「三角形」は「実体」というより「基体」ではあるが (90a13)。

「或る言表」が定義と「なるであろう」とは意味理解に基づく探求の終局のケース ((1) S^+E^+) を未来形で表現している。意味表示と何であるかの言表上の同化が「三角形である限り」という限定により表現されているが、それはこの組み合わせの枠のなかで発見的探求の遂行の帰結として得られる定義と「なるであろう」という未来の成功した状況から語り直されている。定義論においては「或る言表」における意味表示機能は III0 で述べる三種類の定義それぞれに適用される (cf. *Top. I 5 101b38-102a5*)。定義は言語行為だからである。とはいえ、言表(2) S^+E^- も有意義なものであることが確保されている。

五 四つのプレディカビリアの演繹

続いて、『トピカ』における既知なものについての意味表示の二重の機能を明らかにする。これにより意味表示の言表と定義は媒介されるからである。『分析論』では因果論的定義が主要な課題となっているが、『トピカ』においては類と種差による定義のみが念頭に置かれている。『後書』III0 (1) $S^+E^+ \rightarrow$ 『トピカ』16 は同じ状況すなわち例えば三角形のような眼前者が想定されている。眼前者のケースにおいては意味表示の二重の機能ゆえに成功した場合には「何を意味表示するか」を語ることと「何であるか」を語ることが同じ言表となる。

アリストテレスは『トピカ』一卷においてアカデメイアの伝統である「Fは何であるか？」の問のもとにFそのものを捉える言表（ロゴス）を把握する諸条件を問答の技術として展開している。そこでは意味表示の議論が述語の主語に対する述べ立ての様式をめぐって展開されており、彼は18において「何であるか？」に対する可能な応答の分類であるプレディカビリアを「帰納」(103b3)と「演繹」(b7)の双方を通じて導出している。四種の述語は規準「A」即ち主語・基体の「何であるか」の述定に含まれるか、「B」即ち主述が互換されるか、のもとに、「本質を開示する定義形成句」(*horos*) $A+B^+$ 、「固有成性」 $A-B^+$ 、「類」 $A+B^-$ 、「付帯性」 $A-B^-$ の四つのみの網羅的で相互に排他的な組み合わせとなり「確信」(*psittis*) が得られる (103b2f)。19において彼は、十種類の述定を導入しており、四種の述語はそれらの述定において見出され得るものであり、可能な全ての述定は、汲み尽くしつつ相互に排他的なこれら四種から成り立つ。「許容されているものども」「網羅性」の何ものも残さない「排他性」ならば、その者は十全な知識を持つ (1016b9-10)。彼はこれにより「何であるか」へのソクラテス的探求の代わりに、「何であるか？」なしに「然り」または

「否」の応答のみにて対応する弁証術のシステムを構築した (*Met.* 1078b17-30, *Top.* 158a14-17)。彼はいかなる命題も、四つのプレディカビアの一つを含むこととなり (網羅性 101b17f)、『そしてそれらのうちの一つのみを含むこととなる (排他性 101b23-25) 分類規準の確立により「何であるか」の堅固な探求の基礎を提示する (cf. 101a18f, 101b38, 102a31f, 103b15f, 153a15-21)』。この述語と述定の理論は定義の実践において導入されるものどもを含み、全ての命題を検討するための素材を提供することになる。

六 述定の範疇の導出

19 において、アリストテレスは述定の範疇の理論を展開することによって議論、問答の種類を吟味する。その章の結論として彼は「したがって、これら「十種の述定」そしてこれだけのものどもが、問答がそれらに関わりそしてそれらに基づいているところのものどもである」(103b39f, cf. 105a20)と述べており、そこにおいて問われているものどもは、諸存在者の異なるタイプに対応する述定のタイプである。

これら [18 の議論] に続いて、先に言及された四つのものどもがそれらに属するところのものどもにおける諸述定の諸類 (*ta genē tōn kategōriōn*) が区別されなければならない。これらは数において十であり、何であるか、どれほどの量か、どのようなにあるか、どのような関係か、どこでか、いつか、状態にあること、所有すること、能動すること、受動すること、である。というのは、付帯性や類、固有性、定義 (*horismos*) は常にこれらの述定のうちの一つにおいてあるであろう (*estai*) からである。というのも、これらから作られる全ての命題は、何であるか、またはどのようにあるか、またはどれほどの量であるか、もしくは他の諸述定のうちの何かを意味表示すからである (103b20-27)。

私は *'a gene' tōn kategōrion* を「述定の類 (以下 CP)」(103b20) と訳す。時にギリシャ語「述定 (*he kategōria*)」が英語では *'category'* という類やクラスという意味を持つ語に訳されたが、アリストテレスは「述定の類」とは別に「存在者の類 (*'a gene' tū ontōn*)」(以下 CE)」(998b4, 189b24) という表現を用いて、述定における言語表現の類から存在するものごとの類を判別しているように、*'a gene'* が日本語の「類」を意味しており、何らかの誤解によりこの英語表現 *'category'* が生まれたと思われる (cf. 165a38)。

アリストテレスは、私が「述定の類・範疇 (CP)」と呼ぶ述語づけの十種を、通常の様々な疑問詞の形式を検討することに基づいて導入しているように見える。それゆえ彼は、いくつかの疑問詞の形式を、それらの文法形式を変えることなしに、あるいは類・範疇を表示するための専門的な表現へと修正することなしに用いている。彼は議論の数と種類の確定を通じて弁証術を諾否のみの応答により体系化するその試みのうちにあるのだから、これらの表現は疑問詞の考察から導かれて異なるに違いない (所謂疑問詞「いつ、誰が、どこで、何を、どのように」の排除)。だがしかし、疑問詞の様式の数に限られているので、行為主体もしくは事物／出来事の状態や行為、そしてそれがどのように受動しているかを表現する他のタイプの述定は最も可能な広い領域を表現しカヴァーするために、不定法動詞の形式において表現される。これらはすべて現在時制において論じられる可変な行為主体またものごとに関わっている。これらのフリーズは「Fはどのような状況にあるか?」とか、「Fは何を持つか?」、「Fは何を為すか?」、「Fはどう受動しているか?」にたいする略記なのである。

述語づけの十の範疇の選択の正当化として、彼は「常に」という副詞とともに単称未来時制を用いて帰納的議論を提出することにより遂行する (103b23-25)。人は常に他でもなく十種類の範疇のいずれかにおいて

用いられている四種の述語のうちのいずれかを見出すことになる。というのも、これらの文―下位構成要素は常にこれらの述定の一つのうちに（そして他のいずれでもなく）用いられるからである。これが述定の十個の類の選択の基礎である。この文脈では述定が問題になっているので、「定義形成句 (*horos*)」ではなく「定義 (*horismos*)」(b24) という術語が用いられている。というのも、当該の述定はその文の下位である句という構成要素のひとつではなく、命題全体だからである。

アリストテレスは次にプレディカビアと述定(命題)の関連を説明する。「というのは、これら『四つ』を通じて作られる全ての命題は、何であるか、またはどのようにあるか、またはどれほどの量であるか、もしくは他の諸述定のうちの何かを意味表示するからである」(b25d)。もしちょうど文の下位に当たる四つの構成要素やこれらを用いて作られた全ての命題(述定)が、述べられた十種のうちに当てはまるならば、アリストテレスは彼の範疇のリストの網羅性を示していたことになる。全ての命題はこれら十種の述語づけの一つのうちに分類され得るのである。

疑問詞についてのアリストテレスの選択は、恣意的ではない。なぜなら、それらは言語使用の規範上(ロギコース)区別されるからである。これら十の問いにたいする応答は、「何であるか」や「どのようにあるか」、「どれほどの量であるか」等を表示する。新しい問答法の企てにおいて、命題がこれらのどの問いに對する答えであるのかに基づき、全ての命題は十種のうちの一つに収容される。数え上げられた疑問詞のリストが網羅的かつ排他的であるのは長年かけての自然淘汰の力にさらされている日常言語の持つ規範性からして道理あることであり、これらの疑問詞に答えるべく導入された存在者の項ないし術語(例えば実体、性質そして時制のようなもの)のリストが疑問詞についてのこのリストに對應するその事実により確かなものと

される。文―下位構成要素として四つのプレディカビリヤのみが存在する一方で、全ての種類の議論を構成している述定は十種類があると結論づけられている。

七 述定理論に基づく諸存在者の範疇―意味表示の二重の機能―

Ⅰの続く議論で、意味表示の二重の機能が確認される。それに基づき実体とそれ以外の存在者の類の非対称性が主語となつて述語とならない実体語の言語的振る舞いから確立される

これらの議論から、「[Fは]何であるか」を (S1) 意味表示している者 (*ho to ti esti sēmainōn*) は時に実体を、時に性質 (どのようなか) を、そして時にその他の述定の或るものを (S2) 意味表示する (*senainei*) ということは明らかである。というのは、或る人が彼の眼前に置かれており (*ekkeimenon*)、そこに置かれているもの「[F]は人間もしくは動物であると語るときには、彼は「何であるか」を述べており、実体の意味表示しているからである。だが、白色「[F]が彼の眼前に置かれており (*chrōmatos leukū ekkeimenū*)」、眼前に置かれているものは白であるもしくは色であると語るときには、彼は「[Fは]何であるか」を述べており、性質「どのようなか」を意味表示している。同様に、一キュビットの大きさ「[F]が彼の眼前に置かれ、眼前に置かれているものが一キュビットの大きさであると語るならば、彼は「[Fは]何であるか」を述べ、量「どれほどか」を意味表示している。そして、その他のものどもについても同様である。そのようなものどもそれぞれ (*hekaston*) 「[F]に関して、まさにそのもの「[F]が (i) 「[F]それ自体について語られるか、もしくはそれについてその類が語られるかの

いずれかであるならば、その述定は「Fは」何であるか」を意味表示しているが、しかしそれ「F」が(ii)何か別のもの[H(other than F)]について語られるならば、その述定は「Hは」何であるか」を意味表示しておらず、むしろ「どれほどの量であるか」、「どのようにあるか」、あるいは他の述定のうちの一つを意味表示している(103b27-39)。

アリストテレスは今や、どの存在者がそしてどれほど多くの存在者が、「Fは」何であるか」を語ることに関わっている者によって意味表示されるかを提示することへと向かう。彼は「何であるか」を語る者、すなわち「何であるか」を意味表示する者が、時に実体即ち自律的な基体を、時に性質「どのようにあるか」を、時にその他の述語づけの或るものを意味表示すると主張する。彼は、述定の範疇(CP)についての先の議論の結論として、諸存在者の範疇(CE)の新しいリストを提示している。一般的な言い方では、範疇についての新しいリスト(CE)は「何であるか」はどれほど多くの仕方で語られるか?」という問いに対する彼の応答である。さらにそれは、目下の文脈においては、「何であるか?」というソクラテス的な問いがそれらについて適切に提起され得るところの諸存在者は何であるか?」という問いへの応答なのである。アリストテレスによる述定の類のリストが与えられている以上、同一指定する幾つかの語が諸実体やその他の性質等を意味表示することになるということは明らかである。「時に」によって示されるように、帰納的に、述定の範疇に依存しつつ何であるかがそれらに割り当てられることになるところの諸存在者の十種が数え挙げられている。このように、「何であるか」は多くの仕方で語られ得る(cf.1030a17)。新しい体系において、或る実体が「何であるか」は、実体という語を用いて述べられることになり、或る量が「何であるか」は量という語を用いて述べられる。述定の十種類(CP)が相互に排他的であり網羅的であるという事

実は、諸種の同一性述定が配分されるところの諸存在者の数を規定する際に用いられる。

アリストテレスは述語づけの範疇 (CP) という彼の枠組みに基づいて諸存在者の全ての類 (CE) を分類しようとするのであるから、彼は何故諸存在者の類・範疇 (CE) が述語づけの類 (CP) に一致するのかを説明しなければならない。これを為すべく彼は三つの例を提示する。第一に彼は「人間」によって意味表示される存在者 F (例えば「コリスコス」を实体 (*he ipsis*) と同定し、また「色」により意味表示される存在者を性質等というように同定する。F がカリアスの眼前に置かれておりカリアスが F を「人間」とか「動物」とであると述べるとき、彼はそのもの (F) が「何であるか」を述べることによって、(述定の) 第一の範疇において述定を為している。この述定において、「人間」や「動物」という語は世界における或る存在者 (*he ipsis*) を意味表示している。つまり、まさに F が何であるかということである (103b22)。しかし、「人間」という語は二重の機能 (S1) (S2) を持っている。その語は、「(F は人間である)」という命題において (S1) 「人間」が「[F は] 何であるか」を語り、そしてそう語ることにより、(S2) 世界において一致する存在者 F 即ちコリスコスに言及指示してもいるのである。

白色がカリアスの眼前にあり彼が「F」は「白い」とか「色である」と語るとき、彼は (S1) F そのものが白いことを述べ、彼の用いる語が (S2) 或る性質つまり事物がどのようなにあるか (性質の存在論的範疇に属する存在者) を意味表示している。私はこれを「意味表示の二重機能 (dual function)」と呼ぶ。

意味表示の二重の機能は、「何であるかを意味表示している者は (*ho to ti esti semainon*) 時に実体を、時に性質を、そして時にその他の述定の或るものを意味表示する (*semainei*)」(103b27f) という事態のうちに見られる。この箇所において、動詞「意味表示する」が二度登場するが、その一つはひとの言語行為を示す

現在分詞 (*semānōn*) により与えられ、もう一つは現在時制 (*semānet*) により与えられる。「時に」(*pote*) が三回あらわれるので、現在分詞時制を持つ最初のフレーズは「Fとは何であるか?」という問いへの「何であるか」を述べることによる抽象的なレヴェルでの一般的応答を述べているはずである。つまり、それが何であれ「Fが何であるか」を述べることは時に世界における実体を、時に世界における性質を意味表示するということである。意味表示には二つ (S1) (S2) の機能がある。(S1) は二つの言語表現 (例えば、名前「F」と「Fは何であるか?」という問いに応答する「言表・定義形成句」である) を結びつけるが、(S2) は言語表現 (その名前ないし今述べた言表) と世界におけるものごととを結びつける (*pace* 酒井 119 「意味表示の両義性」)。

事物 (ものごと) F の「何であるか」を述べるという単一の言語行為が、当該の語「F」の単一の意味を確定することを通じて世界における F を意味表示する。すなわち、類の語ないし定義形成句は、例えば、「F」は何であるか」を語ること ((S1) 意味表示すること) により (S2) 世界における実体等 F を意味表示する。これが単一の意味表示行為の二重の機能である。

続いて、彼のプレディカビアの理論を基礎に、アリストテレスは述定の類 (CP) と存在者の類 (CE) の対応の理由とその状況をより一般的に説明している。上記の「人間」や「色」の例における「それぞれの」(*hekaston*) という語は (i) それ自体についての述定の一部であるか、(ii) それとは別の何ものかについての述定の一部であるかどちらかである。述定のこの区分は網羅的である、というのも、一方、(i) 同一なものについての述定 (自己述定 *of-itself predication*) は定義形成句か類により構成され、(ii) 他のものについての述定 (他己述定 *of-other predication*) は固有性か付帯性により構成されるからである。もし

(i)「まさにそれ自体」(auto=hekaston)がそれぞれ自体について語られるか、その類がそれぞれ(hekaston)について語られるならば、その述語づけは「何であるか」の述定の範疇に属する。「何であるか」を述べることには十種の異なる様式があり、それらの各々に別々のタイプの存在者(実体、性質、量等)が対応することになる。対照的に、語が(ii)別のものについて語られるときには、当該の述定は後者が何であるかを示さず、どのようなものであるか等を示す。例えば、「白い」が「熊」に述語づけられるときに、それは熊がどのようなものであるかを特徴づける。固有性あるいは付帯性が別のものに述語づけられるときには、その述定は何であるかを示さず、むしろ何か他の存在者の範疇を、それが所有する述定のその他九種の範疇のうちの一つに一致することによって、意味表示する。

しかしながら、実体と他の存在者の範疇との間には非対称性がある。或る実体は、述定の役割を果たし得ないので、タイプ(ii)他己述定においては用いられ得ない。或る人が「赤色は動物である」と述べるならば、「動物」は赤色が何であるかも、どのようにあるかも、また赤色に属するいかなる範疇をも意味表示し得ない。実体術語はタイプ(i)自己述定においてのみ用いられ得る一方、他の語はタイプ(i)と(ii)の双方の述定において用いられ得る。諸実体は決して諸存在者のその他の範疇について述語づけられ得ないのである。ただし、その他の諸存在者はそれらについて適切に述語づけられる。

アリストテレスは実体の範疇(CE)が「何であるか」の範疇(CP)に一致すると主張することが出来る。なぜなら、実体術語はタイプ(i)の述定においてのみ用いられる語に限られる一方、その他全ての語はタイプ(i)および(ii)の双方の述定において用いられ得るからである。実体にあたる諸語が果たす唯一の役割は、「Fは何であるか?」という問いへの応答においてFが何であるかを特定することであるから、実

体にあたる諸語はFがどのようなかやそれがどれほど大きいかといったことを述べるべく用いられ得ない。対照的に、他のタイプの語は何であるか（或る量等）やどのようなか、どれほど大きいかも述べることが出来る。実体にあたる諸術語は「Fは何であるか？」という問いに応答する際に用いられ得るのみである一方、その他全ての諸語はこの問いに応答する際にもその他の問いに応答する際にも同様に用いられ得る。さらに諸実体は、実体以外の全てのタイプの存在者が（i）と（ii）のタイプ双方の述定において述語づけられ得るように、タイプ（i）自己述定においてのみ述語づけられ得る唯一のタイプの存在者であることになる。

実際、『形而上学』VIIIにおいて、アリストテレスは存在のロギコスな分析を遂行することにより、実体の存在論的優先性を確立しまた実体と他の存在者の存在論的非対称性を確立している。VIIIの論述は「何であるか」を述べることの二重機能に訴えそして実体と他の範疇の述定の非対称性に訴えており、『トピカ』19における当該箇所を展開するものであると言うことができる。

「在る」は多くの仕方で語られる。・・・というのも、一方それは（S1）「何であるか」をそして（S2）或るこれ（*mode ti*）を意味表示しており、他方、それは（S1）「いかにあるか」、または「どれほどの量であるか」、またはこの仕方で述語づけられる他のものどもの「それぞれ」を意味表示しているからである。「在る」はこれだけの仕方で語られるので、これらの第一存在者は、実際、（S2）実体を意味表示する何であるか（*to ti esti*）であること明らかである。なぜなら、われらが（S1）「これはいかにあるか？（*poion ti mode*）」を語るとき、われらは「善い」とか「悪い」とか言ひ、「三キュビット」とか「人間」とは言わない。しかし、われらが（S1）「何であるか」を言うとき、われらは「白」とか「熱

い」とか「三キュビット」とか言わずに、「人間」とか「神」と言う」(1028a10-18)。

つまり『トピカ』19に関連する二つの点だけを挙げる。第一に、(S1)「何であるか」を語ることにより意味表示される或るこれ (node *ti*) は (S2) 実体である(「これ」と指示される実体を指示の具体的な文脈ではなく一般的に語るとき「或る (*ti*)」が付加される)。問い「カリアスは何であるか？」に対し、「彼は (S1) 人間である」と言うことにより応答するとき、われらは同時にカリアスにより例化されている (S2) 或るこれを指示している。アリストテレスは自己述定が第一義に実体に属することを指摘することにより、実体の優先性を主張している。彼は「これらの第一存在者は、実際、(S2) 実体の意味表示する、何であるかである」と語っている。彼は問い「何であるか？」に対する一般的かつ抽象的な応答であると想定されている「何であるか」の領域を「実際、実体の意味表示する」という従属節を加えることにより限定している。この限定により、彼は「何であるか」の使用を実体の場合にのみ限定している。他の存在者は、実体の同一性が第一義に固定される限りにおいて、「これ (node) はいかにあるか？」のように「これ」について述語づけられうる。

問い「これは何であるか？」に対し答えることは第一義的に実体に向けられる。存在者のあらゆる種類のなかで、第一義的な存在者は実体の意味表示する何であるかである。というのも、実体であるところの「これ」が自己述定により固定されないなら、性質や量などの他の存在者は基体「これ」について述語づけられないからである。われらは「人間」や「神」のような実体語について言及することにより、「これはいかにあるか？」という問いに答えるべきではなく、「白」とか「善い」等の他の種類の術語に訴えて答えねば

ならない。この様式において、『形而上学』VIIIにおいて、彼は存在論的に (i) 何であるかの述定と (ii) 述定の他のタイプの非対称性を確立している。彼はまた述定の類 (CP)、とりわけ何であるかと存在者の類 (CE)、とりわけ実体のあいだの対応を確立している。

七 魂の受動様態のシンボル（代理）としての言葉即ち約定的記号

最後に、アリストテレスの意味論が意味表示の二重の機能を担いうるものであり、また非存在者 (2) ^{SE}をも包括しうるものであることを心魂の機能の分析を介して確認する。彼は『命題論』冒頭で次のように、これら三つの関係を提示している。

声で話された言葉は魂における受動様態のシンボル「徴・代理」であり、書かれた言葉は声において話された言葉のシンボルである。そしてちょうど文字がすべてののひとにとって同じではないように、音声もすべてののひとにとって同じではない。しかしながら、これら「文字、音声」は第一に (*prōtios*) 魂が持つ受動様態の記号 (*semeion*) であるが、この受動様態はすべてののひとにとって同じものである。また魂の受動様態はものごとの類似物であるが、ものごとはもとよりすべてののひとにとって同じものである。このことについては『魂論』で論じられた (*De Int. I.16a3-9*[Bekker] 酒井154ff)。

ここに言語と魂とものごと (世界・実在) 三者の因果的な関係が簡潔に提示されている。名前「キケロ」はものごとキケロではなく「第一に (*prōtios*)」(Bekker) 魂の受動様態の一つである思考の「シンボル・徴・代理 (*symbolon*)」である。これはまだ他の思考のシンボルである動詞と結合されてはならず、それが

結合されることにより、例えば「キケロは走っている」という文において、ものごとの側でそのとおりにあるかあらぬかにより、真偽が決まる。言語は第一に魂と関わり、魂の受動様態のシンボル・微ないし代替物であり、第二義的にもものごとのシンボルであると言える。⁽³⁾ なお、「キケロ」や「人間」という名前は約定的につき「いかに語るべきか」という規範のもとに思考に関連づけられており、その約定性が「記号 (semeion)」という一つの約束のもとに成立する言語網を形成する。それらは記号として一つの約定世界において存在資格を有している。そして思考が何の思考であるかによって、思考の同一性が定まる。ここで思考が何についてあるかを決定するものに関しては、アリストテレスは魂の受動様態がものごとの類似物であることから、ものごとそれ自体であると理解している。ものごとと魂の受動様態例えば知覚の関係は約定的ではなく、自然的因果関係においてあり、すべてのひとにとって同一であるとされる。⁽⁴⁾

世界の存在様式に即して魂はそれを受動し、それについて約定的に言語を定めている。この過程は受動者（魂）が能動者（ものごと）に似たものにされることである。これが成功するとき、ものごとの形相（ロゴス）が能動者から受動者に移行される。この形相移行様式が實在論的意味論の要諦である。自然本性上のものごとの本質の知識を学習した者はそれに基づき、意味を約定的に確定することができる。他方、「ペガサス」のような非存在は實在からの因果的なインパクトを受けないが、馬と鳥については受動していることから、「半分鳥かつ半分馬」という約定により音声ないし文字は魂の受動様態を結合したものとして有意味性を確保している。それは言語が「第一に」魂の受動様態のシンボルであることに基づく。

九 結論 魂が意味の把握に関しては言語とものごとのあいだに介在する

意味の把握に関しては魂を言語とものごと（實在）のあいだに介在させることにより、第一義的に魂の受動様態のシンボルである記号としての言語表現同士の連関は魂において理解されるものである。なお言語表現の結合を介しての意味表示即ち指示は魂を一旦介して、もし成功する場合にはものごとに向けられている。語句の意味は自然本性上の實在の理解を要求することなしに教える者と学ぶ者のあいだで記号のあいだの関係として理解されることが出来る。言語表現 (*to legomenon*) に関してひとは約定的な関係において理解しており、実際、世界がいかにあるかとは関わらず、言語表現同士の関係として語句の意味を「いかに語るべきか」の規範性のもとに教えまた学習することが出来る。たとえば、言語の意味は世界・ものごとの存在様式により確定されるものであっても、語句の意味を理解することにはその対象の存在の知識さらには本質の知識は要求されていない。探求の第一段階で誤った意味理解を提示する言表 (3) SE_+ 、(4) SE_- は淘汰される。アリストテレスの存在論が實在論的なものであり、一方、言語の意味は最終的に世界の在り方に依存しており確定され、専門家により教えられる。これは「實在論的意味論」と呼ばれよう。しかしその意味の理解は世界の在り方の知識なしに得られるものであり、これは「ロギコス意味論」と呼ばれよう。これらは一方、意味の確定は實在論的であり、意味の理解は矛盾律に基礎づけられつつ約定的に定まるロギコスなものであることにより矛盾しない。世界の側から意味を語る場合と心魂による意味の理解を語る場合双方のアクセスが許容されている。

- (1) 本稿は、東北大萩原理氏主催による酒井健太郎氏『アリストテレスの知識論』(九大出版会 二〇二〇)の書評会に招かれたのを契機に執筆の機会を頂いたが、知識論の基礎となる意味論と定義論の関係を論じることにより「意味論と知識論をより密接に関連づける」(p.163) 勇敢な企てを遂行する氏への応答を意図している。紙幅上氏の見解との関連箇所は本文中に(酒井X)と頁数のみ記し不同意のさいはpaceと記す。本稿の基礎的議論についてはK.Chiba, *Aristotle on Essence and Defining-phrase in his Dialectic, Definition in Greek Philosophy*, pp.220-245, ed. D.Charles (Oxford 2010), K.Chiba, *Aristotle on Heuristic Inquiry and Demonstration of What It Is, Oxford Handbook of Aristotle*, ed.C.Shields, p.195-201 (OUP 2012) および『信の哲学—使徒パウロはどこまで共約可能か—』上巻第一部(北大出版会 二〇一八)参照。
- (2) 氏は一方で「定義とは実在的なものである」(p.128)と「繰り返し」述べるが、他方、「意味表示が部分的定義たりうる。語の持つ意味内容は結局のところ思考内容であり、思考内容は実在から因果的に成立するものであるため、使用される語の意味は実在に由来するものである。それ故、・語の意味内容は実在に食い込んでいる」(156)と主張する。この理解の要因は「或る定義は、名が何を意味表示しているかの言表であることは明らか」(93630,p.100,107)という氏が主語を「或る定義」とし、さらにbe動詞未来形を訳出せず「である」と同定することに求められる。「明らか」であるのは定義と意味表示の言表の組み合わせによるものであり、或る意味表示の言表(一)stnが定義となること「明らか」なのであって、逆ではなく探求の第一段階で容認される意味表示の言表は探求の終わりに得られる「何であるか」の言表である定義にはどこまでもなりえず、それ故「部分的定義」(169)「名目的定義」(109)と呼ばれることもない。
- (3) なお、十の範疇は『トピカ』においてこのように初めて導出されており、『範疇論』は年代的により先の作品では決しておらず、実際には、『第一実体』と『第二実体』(2a11-14)の区別、さらには「結合なしに」(1a16)語が分類されるという考えは「述定」の分類を企てる19とは明白に異なる主張を含んでおり後代の誰かによる作品であると思われる。
- (4) 氏はp.156の「結局」意味内容と思考内容の同定を主張するさいに、D.Charlesのこの箇所を理解の紹介で約定的な記号と魂におけるものごとの受動様態の関係「直接的」と「間接的」の区別は「テキストに明示されていない」とする。しかし、副詞句「第一に」(Bekker)が約定的な記号と自然的な魂の受動様態の直接的、間接的関係を裏付けている。意味理解はものごとの「シンボル・代理」である言語が担う「記号」と「記号」のあいだの約定的なものであるが、間接的には、意味表示の二重の機能のゆえに形相を受容した魂における類似物を介して世界のものごととその形相に指示が届く。この媒介故に実在論の意味論とロギコスな約定的意味理解は両立する。意味表示の二重の機能は氏の言う「意味表示の両義性」(19)とは異なり「曖昧」ではなく、「*schwunet*」が言語と存在の両者にまたがる概念」ではなく、言語行為として一方向で

ある。

(ちば
けい・北海道大学名誉教授)